ゼロの使い魔//迷い込んだイレギュラー

普通の魔法使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔／／迷い込んだイレギュラー

【Ｎコード】
Ｎ３６２３Ｗ

【作者名】
普通の魔法使い

【あらすじ】
衝動で書きました。かなりの駄作になりますがよろしくお願いします。

さて、内容はと言いますと…題名のままです。

基本的に才人とルイズはつけるつもりですが他はどうなるか分かりません。

好奇心は災いの元

「…なあ才人…」

「…何だよ悠太…」

「…俺の見間違えじゃ無かったら…俺は大変な物を見てる気がするんだが…」

「…うん。多分大変だと思う…」

そう言うと才人は近くにあった石を目の前にある光る鏡の様な物に投げた。

「「…」」

次に悠太が持っていた釣り竿を入れて引いてみた。

「別に何ともないな」

「なぁ悠太、中に入ってみない？」

「そうだな、ちょっとだけなら大丈夫だろ」

「「せーの」」

次の瞬間、才人と悠太はその場から消えた。

好奇心は災いの元　（後書き）

感想よろしくお願いします。

キャラ設定

大原悠太（おおはら ゆうた）

１７歳（男）

才人の親友。

かなりのイケメン。

才人と同じぐらい好奇心がある。

サバイバル能力に長けている。

すぐにその環境に慣れることができる。

戦闘能力は素手で熊を倒すなど常人の域を逸している。（また、ほぼ全ての武道を制覇している）

悠太がいるため、実際とは違う物語になってしまう可能性がある。

女神？によって考えるだけでそれができる能力が与えられる。

才人はルイズと使い魔の契約をしているのに自分は何も無い（単なる平民扱い）なので、時々才人で遊ぶ。

キャラ設定（後書き）

こんな感じでしょうか…

才人の前にはルイズで俺の目の前に爺が居るんだよ！！

ｓｉｄｅユウタ

「痛っ！」

ふと気がついたら周りが真っ白な空間だった。

「あれ？何で此処に…てか才人は！才人ー！！！」

「あの少年は今異世界に居るよ。」

「誰だ！」

そこにはよぼよぼの爺がいた。

「誰ってそりゃ神様だよ」

「…」

「おい、女神じゃなくて悪かったな」

「えっ？」

「何で分かったか知りたいだろ。なんせ神様だからな。因みにもう一人の少年は目の前に可愛い子がいるぞ」

「ほー。そうか、そうか……殺してやる…」

完全に目が据わっていた。

「待て待てマテ茶」

「なんだよ」

「実は本当はお前は来ない筈だったんだが、何故か来てしまってな、そこで元の世界に戻そうとはしてるんだが、なかなか難しくてな、その間お前はあの少年のそばにいて欲しいのだが…」

「何故？俺は何の能力も持ち合わせてはいないぞ」

「だから能力を渡そうと思って来たんじゃよ」

「だったら早く渡せ。今すぐ」

「まぁ慌てるな。能力についてだが、頭に思い描いたものがそのまま発動するようにした」

「ありがとう。じゃあ行ってくる。」

「何か困ったことがあれば神様ってお願いしてみろ。助けてやるから」

「了解した。」

次の瞬間悠太は空間から消えた。

才人の前にはルイズで俺の目の前に爺が居るんだよ！！（後書き）

急いで書いたのでグダグダですが、ご了承ください。

やっとルイズに会え・・・何？平民には興味無いから消えろだって？

ｓｉｄｅサイト

「あんた誰？」

才人の顔を覗き込んでる女の子が言った。

女の子はどこかの学校の制服だろう。

見たことも無い。

周りに集ってる人間も大体がそんな格好だ。

「あれ？悠太は？もう一人連れがいたんですけど…」

「何言ってるのあんた一人に決まってんじゃない。それより誰よ？」

「俺は平賀才人」

「どこの平民？」

…平民？

「まぁ良いわ。あんた、感謝しなさいよね。貴族にこんな事されるなんて、普通は一生無いんだから」

貴族？アホか。何が貴族だ。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンダゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

朗々と、呪文らしき言葉を唱え始めた。

そして、ゆっくりと唇を近づけてくる。

「な、何をする」

「良いからじっとしてなさい」

その時、

「才人何を…」

悠太の声がした。

「悠…ん…」

ルイズの唇が才人の唇に重ねられる。

俺のファーストキス！

「終わりました」

次の瞬間才人の体が熱くなった。

「熱い！」

「すぐ終わるわよ」

「…俺を忘れんじゃねー！！！」

悠太が叫んだ。

「あれ？何で平民がいるのよ」

「俺は平民でもねーよ！」

「どっこからどうみても平民じゃない。貴族に向かっていい口利いてくれるじゃない」

「だから平民じゃねー！」

次の瞬間悠太の周りに雷が落ちてきた。

「才人！貴様も何やってやがる！」

「待て待てマテ茶」

「ふざけてんじゃねー！！」

「ふざけてな「お前の行動万死に値する！！」値しねーし！ってかマジで怖い」

「五月蝿い！！」

そう言って右手を向けた。

「食らえ！ザケル！」

次の瞬間悠太の手から雷が出てきた。

やっとルイズに会え・・・何?平民には興味無いから消えろだって?（後書き）

術紹介

ザケル

優しい王様になった子供とその兄が使う呪文。

平民のくせに魔法が使えるだって？だから平民じゃないよ！！

ｓｉｄｅルイズ

ルイズは驚愕していた。

平民が呪文無しで魔法を放ったのだから。

しかも一撃で半径５メートルも焦がしていた。

その時ルイズはなぜあの平民が使い魔ではなかったのかと思っていた。

ｓｉｄｅコルベール

コルベールは才人の使い魔のルーンを見ていた。

「珍しいルーンだな。よし皆教室に戻るぞ」

そう言って『フライ』を使ってルイズたちを除いた生徒が飛んでいった。

ｓｉｄｅ悠太

「…ちょっとやりすぎたかな～」

才人が女子とキスしたところを目の当たりにしてしまった時に怒りで頭がいっぱいになってしまった。

その時に漫画であった技をつい使ってしまった。

「…しかし強いな…」

「ねえ、そこのあなた」

「…何？」

「こいつを私の寮まで連れて行って頂戴」

「…了解」

そうして才人を背負ってルイズの寮まで行った。

～数分後～

「ここまでいいわ」

「ほいよ。ところで俺はどこに行けば…？」

「何言ってるの？こいつは私の使い魔になったから私の部屋にいるのであって、あなたはどっかいきなさい」

「何でだよ！俺も才人と同じようなもんだろ！」

「だから、平民はいりませんから」

「だから俺は平民じゃねーよ！」

決闘？なにそれ？おいしいの？

ｓｉｄｅ悠太

あれから数時間後、悠太はルイズの部屋の前で寝ることが決定した。

その時にルイズが

「平民のくせに…」

と言っていたが、これ以上反論するのも馬鹿らしくなって、シカトした。

今の装備はと言うと、持ち込んだ色々な道具と毛布、藁だけ。

ちなみに、毛布はルイズから、藁はそこらへんから調達したやつである。

中では才人がまだ異世界から来たと言っているがもう正直どうでもよかった。

「…明日何食べようかな～」

そう考えながら、持ってきた道具の整備をしていた。

ｓｉｄｅ才人

あれから何時間たったのだろう…。

多分３０分位だったかも知れないけど、とにかく長い間違う世界から来たと主張していた。

悠太は多分面倒になったから道具の整備でもしてるんじゃないかな～。

「ねえ、聞いてるの？」

「…何だよ」

「貴族に向かって何てｋ「だから、そんなの知らないって」じゃあ知りなさいよ！」

正直疲れた。

大人しければ可愛いのに勿体無い。

「ところで、俺はどこで寝れば良い？」

「もちろん床でしょ？」

「…人間として見てもらえてるのか？」

「当たり前じゃないの。平民にはそれで十分でしょ？」

…凄い。

犬並みの扱いに泣けてきた…。

そんな感じで一日が終わった。

数日後

ここはトリステイン魔法学院の食堂。

今ここで悠太と金髪の男（確かギーシュだったかな？）と口論になっている。

原因はギーシュ？の二股がばれたのが悠太の所為だと（二股架けるほうが悪いだろ…）

「ならば決闘だ！」

おっ？何か話が危ない方向に行きそうな気が…

「決闘？何それ？おいしいの？」

次の瞬間みんなが大笑いし始めた。

「要は戦うと言うことだ。平民」

「ふーん。面白い。貴様の歪み俺が断ち切ってやる！」

ついに決闘だ！・・・あれ？術禁止？それ決闘じゃないだろ！

ｓｉｄｅ悠太

あれから数分後、ヴェストリの広場に来ていた。

「諸君！決闘だ！」

うおぉぉぉぉ！！

「逃げなかった事は褒めてやろう」

「お前に褒められたくは無いね」

「その口何時まで聞けるかな？」

「そろそろ良いか？」

「あぁ、お前の変な術禁止だから」

「なっ…！お前卑怯だぞ！」

「知った事か」

「なら、剣だけでも良いか？」

「それならくれてやる」

そう言ってギーシュは杖を振った（杖は薔薇の形をしていた）

そして散った花びらの一枚が剣に、もう一枚が青銅の物体になった。

「君にはこいつと闘って貰おう」

「…もはや決闘って言わないよな…」

そう言いながらゴーレムを斬った。

一瞬でゴーレムは砕け散った。

「な…！貴様どう言う事だ！」

「いや、もはや決闘でもなくなったみたいだからほんのちょっと本気出してみた」

実際は直前で「ラウザルク」を使っていたがそこは言わなかった。

（だってそのほうがカッコいいじゃんｗｗ）

「ッ！」

「お前もこうなりたくなかったらさっさと引き上げな」

「…降参だ」

うおぉぉぉ！

歓声が正直五月蝿くてしょうがない。

「眠いしそろそろ寝るか」

そう言いながらルイズの部屋に戻った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3623w/

ゼロの使い魔//迷い込んだイレギュラー

2011年10月2日08時08分発行